¹²Cにおける3α相関の解析 Hoyle状態はα凝縮しているのか?

千葉陽平 大阪市大 & NITEP

共同研究者:山本昌幸(原子核理論B4)



- ¹²CのHoyle状態(0+2状態)はα凝縮状態であると考えられている
- 少なくともα凝縮をリスペクトした模型(THSR)が最も成功を収めているのは事実ではあるが、α凝縮していることの実験的証拠はない。
- 励起エネルギーを再現していても、Hoyle状態の構造は理論模型により異なる。特に相互 作用依存性(クラスター由来 or 平均場由来)が顕著。
- 今回はそもそもHoyle状態がα凝縮状態なのかを理論的に解析した結果を紹介したい

Geometric ? Dilute-gas? α condensation?

- "three alpha particle in a line" (H. Morinaga, Phys. Rev. 1956)
- Dilute 3alpha gas (GCM, RGM...), "no specific configuration" r > 3.2 fm

 $(\mathbf{W} - \mathbf{A} - \mathbf{W})$



補足:この時点でHoyle状態に関する観測量はおおよそ説明可能

α condensation: THSR (container picture) Tohsaki et al., PRL (2001)



基底状態・Hoyle状態の波動関数をそれぞれ"ほぼ"1つのTHSR波動関数で記述可能

- 基底状態:1つのTHSR波動関数との重なり~0.99
- Hoyle状態:基底状態を記述するTHSR波動関数と直交化したTHSR波動関数との重なり~0.95



FIG. 9. Excitation energies measured from the 3α threshold. Theoretical results by the REM, THSR [18,23] and RGM [2,3] are compared with the experiments [13–16,19,72–76]. The calculated 4_1^+ , 4_2^+ , 5_1^- , and 5_2^- states are labeled according to the observed counterparts.

R.Imai and M.Kimura PRC99 (2019)



FIG. 5. Comparison between the low-lying experimental spectrum of ${}^{12}C$ and the energies of the oblate symmetric top calculated using Eq. (2) with parameters that are discussed in the text. The levels are organized in columns corresponding to the ground state band and the vibrational bands with *A* and *E* symmetry of an oblate top with triangular symmetry. The last column on the left-hand side, shows the lowest observed non-cluster (1⁺) levels.

D_{3H}対称性で観測データを説明可能 この模型ではHoyle状態は正三角形の大きさだけが変 化する breathing mode. つまり、3つのαが同時に運動し ている状態

平均場模型を用いたHoyle状態の記述

¹²Cにおける平均自棄半径についてのまとめ



Y. Fukuoka¹

Y. Funaki^{2,3}, K. Yabana^{1,2,3}, T. Nakatsukasa^{2,3}

1 Graduate School of Pure and Applied Sciences, University of Tsukuba

- 2 Center for Computational Sciences, University of Tsukuba
- 3 RIKEN Nishina Center

RCNP 研究会「クラスターガス状態探索のための研究戦略会議」

Hoyle stateについて

Hoyle stateのエネルギーが小さくなる につれ、平均二乗半径も同様に小さ くなっていく

半径が大きいこととエネルギーが 低いことが両立できない

0 ₂ +	全エネル ギー [MeV]	平均二乗半 径 [fm]		
クラスター	-75.08	3.33		
クラスター (虚時間)	-93.08	2.98		
全て	-95.84	2.72		
虚時間	-96.17	2.72		

		Exp.	AMD (*1)	FMD (*2)	RGM (*3)	BEC (*4)	GCM (*5)	Cal.
平均二乗半径 (fm)	01+	2.31	2.53	2.53	2.40	2.40	2.40	2.53 ± 0.01
	02+	-	3.27	3.38	3.47	3.83	3.40	2.72 ± 0.01
Monopole (efm²)	$0_1^+ \rightarrow 0_2^+$	5.4(2)	6.7	6.53	-	6.45	6.6	4.88±0.40

M(E0)は他の理論計算は大きく、我々の計算結果は小さい

17

平均場由来の相互作用(Skyrm, Gogny相互作用)とクラスター由来の相互作用 では半径が大きく異なる。さらに具体的にどのように構造が違うは誰も議論し ていないうえ、本当にα凝縮しているかは検証されていないのが現状。



- 問題はどのような構造を持つかで言い換えると、どのように3つのαクラスターが相関して運動しているかである
 - α凝縮:無相関
 - 幾何学的構造:強相関



- そこで3αの波動関数を12体系の波動関数から抽出して、相関について調べれば理論的に はα凝縮なのかどうかがわかる。
- ここでは平均場由来の相互作用とクラスター由来の相互作用を使った結果を紹介

AMD(Antisymmetrized Molecular Dynamics;反対称化分子動力学)

$$\Phi_{AMD} = \mathcal{A}\{arphi_1 arphi_2 \dots arphi_A\}, \ arphi_i = \exp\left[-\sum_{\sigma=xyz}
u_\sigma \left(r_\sigma - rac{Z_{i\sigma}}{\sqrt{
u_\sigma}}
ight)^2
ight] \otimes (lpha_i|\uparrow
angle + eta_i|\downarrow
angle) \otimes \xi_i$$



クラスター構造を仮定せずに基底状態・励起状態を記述可能



Results of ¹²C

J^{π}	SU(3)-constraint		V	٩P	exp	
$r(0_1^+)$		2.53		53	$2.33\pm0.02~\mathrm{fm}$	
$r(0_2^+)$		2.90	3.	27		
$r(0_3^+)$		3.85	3.	98		
transiti	ions	SU(3)-const	raint	VAF	exp	
$M(E0; 0_1^+)$	$\rightarrow 0_2^+)$	5.8		6.7	$5.4\pm0.2~{\rm fm}^2$	
$M(E0; 0_1^+)$	$\rightarrow 0^+_3)$	0.0		2.0		
$M(E0; 0_2^+)$	$\rightarrow 0_3^+)$	11				
$B(E2; 2_1^+)$	$\rightarrow 0_1^+)$	9.3		8.5	$7.6 \pm 0.4 \ e^2 {\rm fm}^4$	
$B(E2; 4_1^+)$	$\rightarrow 2^+_1)$	19.0		16		
$B(E2; 2_1^+$	$\rightarrow 0^+_2)$	4.39		5.1	$2.6 \pm 0.4 \ e^2 {\rm fm}^4$	



Y. Kanada-En'yo. Prog. Theo. Phys. 117 655 (2007)



Reduced width amplitude: 微視的波動関数から抽出したクラスター波動関数

RWA: クラスター波動関数
$$\langle 3 | {}^{\prime} C (0 , \lambda) \rangle$$

 $y_{l=0}(r_1, r_2) = \sqrt{\frac{12!}{(3!)^4}} \left\langle \delta(r_1 - \xi_1) \delta(r_2 - \xi_2) Y_0(\hat{\xi}_1) Y_0(\hat{\xi}_2) \phi_\alpha \phi_\alpha \phi_\alpha | \Phi_{\rm C}^{0+} \right\rangle / r_1^2 r_2^2}$

クラスターの確率密度分布
$$ho_l(r_1,r_2) = |y_l(r_1,r_2)|^2,$$

•



S-factor: クラスターである確率

$$S_l = \int r_1^2 dr_1 r_2^2 dr_2 \;
ho_l(r_1,r_2) \; ,$$

$r_1 r_2 \rho_{l=0}^{1/2}(r_1, r_2)$ with AMD+Gogny D1S



$r_1 r_2 \rho_{l=0}^{1/2}(r_1, r_2)$ with AMD+Volkov No.2



	S_0	$ig\langle r_1ig angle$	$\left< r_2 \right>$	$ ho\left(r_{1},r_{2} ight)$
0^+_1	0.17	$2.98~{ m fm}$	$2.89~{ m fm}$	0.17
0^+_2	0.38	$4.02~{ m fm}$	$4.25~{ m fm}$	(-0.36)



۵

$r_1 r_2 \rho_{l=0}^{1/2}(r_1, r_2)$ with Brink model+Volkov No.2 (山本計算)



- ¹²CのHoyle状態(0+2状態)はα凝縮状態であると考えられている
- 少なくともα凝縮をリスペクトした模型(THSR)が最も成功を収めているのは事実ではあるが、α凝縮していることは実験的には証拠がない。
- 励起エネルギーを再現していても、Hoyle状態の構造は理論模型 により異なる。特に相互作用依存性(クラスター由来 or 平均場 由来)が顕著。
- 我々の理論計算では、Hoyle状態はクラスター由来の相互作用だとα凝縮ではない。平均場由来の相互作用の場合はα凝縮が支配的に見える。

- Volkov No.2 + zero-range ls interaction(Gogny D1S)
 - スピン軌道相互の強さはGogny D1S を基準にファクター0,0.5,1.0の3パターン
- 各パラメータで以下の手順を実施する
 - TDAMDで3αクラスター波動関数を初期波動関数として基底関数を生成する
 - 基底状態の波動関数をパリティ射影後のエネルギー変分で生成
 - 以上で求めた基底関数を使ってGCM

$$\Psi_{n}^{J\pi} = \sum_{iK} g_{iK}^{J\pi} \hat{P}_{MK}^{J\pi} \Phi_{AMD}(t_{i}) + \sum_{K} g_{K}^{J\pi} \hat{P}_{MK}^{J\pi} \Phi_{AMD}^{opt}$$

初期波動関数の3αクラスター波動関数はすべてのパラメータで同一にする